

Title	ソーシャルワーク実践過程におけるアセスメント機能
Author(s)	中村, 佐織
Editor(s)	
Citation	社会問題研究. 1998, 47(2), p.149-163
Issue Date	1998-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/6770
Rights	

ソーシャルワーク実践過程における アセスメント機能

Functions of Assessment in Social Work Process

中 村 佐 織 (長野大学)

1. はじめに
2. 実践過程の意味
3. アプローチ別にみるアセスメント特性
4. 他局面とアセスメントの関係
5. メゾ・ソーシャルワークのアセスメント展開
6. おわりに

1. はじめに

近年、アセスメント概念は、ソーシャルワークの方法展開に飛躍的に取り入れられ用いられてきた。特にわが国におけるアセスメント研究は、援助に向けての情報収集を行う質問紙やチェックリストの活用をつうじて問題認識を行う具体的方法と連動して注目されてきたといえよう。それは、ケアマネジメント概念が高齢者や障害者のソーシャルワーク実践に導入され、具体的社会福祉施策と直結したケアプラン作成の効率よい手続きや方法としてアセスメントを認知してきたことと関係が深い。

しかしアセスメントは、単なるソーシャルワーク援助の手続きや方法ではない。アセスメントは、ソーシャルワーク実践過程で機能してこそ効果的で適切な援助を導くことができるものである。すなわちソーシャルワーク実践の効果は、問題や達成課題に応じて多様なアプローチや機能を駆使しながら、過程展開していく結果から現れるものであり、そこに過程を見据えたアセス

メント局面の展開が必要不可欠なのである。

すでにアセスメントをソーシャルワークの実践過程をとおして研究していくことについては、拙稿⁽¹⁾のなかで

- ①エコシステム視座の具体化
- ②ソーシャルワーク実践の中心概念の展開
- ③他局面に対する関連性
- ④具体的技法としての有効性

という4つの視点からその意義を明確にしてきた。

そこで本論文では、次の段階としてこれら4つの視点を視野に入れ、実践過程のなかでアセスメントがどのような特性をもちながら機能するののかについて考察していきたい。具体的には、まず実践過程の意味を明確にし、過程とアセスメント局面の関係が比較的理解できる①各アプローチの過程と、②他局面とのかかわりの視点からアセスメントの特性と機能を明確にしていきたい。そしてこのような考察をふまえ、ソーシャルワーク実践過程におけるアセスメントがどのような機能や役割をもち展開していくのかを考えてみたい。

2. 実践過程の意味

過程は、1970年代に入りようやく過程そのものが注目され、インテークから終結に至るまでの一連の過程展開の重要性が強調されてきたといえる。しかし歴史を振り返れば、過程は、方法の単なる展開手順であったり、援助関係を進展させるための基本的枠組みとしかとらえられてこなかった。このようにソーシャルワークの過程研究は、始まったばかりで、実践過程におけるアセスメントを考察するには、まず過程の意味を明確にすることから始めなければならない。

一般的に過程とは、「特殊な結果や終わりに方向づけられた一連の統制さ

(1) 拙稿「ソーシャルワーク実践過程としてのアセスメント研究の意義」『社会問題研究』第46巻 第1号 大阪府立大学社会福祉学部 1997年 89-91頁

れた行動や系統的な動きからなる操作を順序だてて継続していくこと」⁽²⁾と理解されている。機能主義学派が過程の重要性を強調して以来、過程は、ソーシャルワーク実践の構成要素の一つとして理解されてきたが、過程を定義しその重要性を強調する研究者は少なかった。

しかし1970年代に入り、サイポーリン(Max Siporin)が、「過程とは、初期、中期をへて一定の結末へと向かう秩序と局面をもった一連の行為で、時間的経過をへて変容の局面を展開し、前進運動としての行為の積み上げをする援助の筋道をいう」⁽³⁾と、その内容を明確に示した。また小松源助によると、「過程は、社会福祉実践の目的を実現していくために意図的に一定の段階を通してなされる一連の行為を総称している。」⁽⁴⁾と定義し、メイヤーら(Carol H. Meyer)も「過程は、行動や動きを意味する。それは、次に何が起こるかを説明する道筋であり、すべての実践アプローチは、たとえそれぞれ専門用語、強調点、目的に相違があろうとも過程を必要とするのである。」⁽⁵⁾とソーシャルワークにとって過程の不可欠性を説いてきたのである。

そして、これらの定義を集約したのが「過程とは、クライアントとソーシャル・ワーカーとが協働し、生活援助を通じた課題解決や、それによる変容・成長を目標に、時間的経過のなかで局面を展開して提供する一連の援助行為の積み上げからなる実践活動であり、その成果は、フィードバックされ、さらにクライアント援助に焦点化される科学的かつ専門的な援助システムの流れである」⁽⁶⁾といえるだろう。

こうした定義は、機能主義学派のスモーリー (Ruth E. Smally)が実践の原則としてあげた「ソーシャル・ワーク過程における効果は、一次的な場合も二次的な場合も、過程における時間の段階（開始期、中間期、終結期）を、

(2) Bradford W. Sheafor, Charles R. Horejsi, Gloria A. Horejsi, *Techniques and Guidelines for Social Work Practice*, Allyn and Bacon, Inc. 1988, p.72.

(3) Max Siporin, *Introduction to Social Work Practice*, Macmillan, 1975, p. 47.

(4) 仲村優一、小松源助編 『社会福祉実践の方法と技術』 有斐閣 昭和59年 27頁

(5) Carol H. Meyer, Mark A. Mattaini (ed.), *The Foundations of Social Work Practice*, NASW Press, 1995, p. 116.

(6) 太田義弘 『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』 誠信書房 1992年 142 頁

ワーカーが意図的に活用することによって促進される」⁽⁷⁾ や、診断主義派の心理社会的アプローチを主唱したホリス(Florence Hollis)の「処遇過程は、ケースワークのなかで起こる変化の手段と、診断によってワーカーが手段の選択をする方法をわれわれに教えてくれる。」⁽⁸⁾ という内容を包括した新しい過程を意味している。すなわち、ソーシャルワークの求める過程は、

- ①過程は、すべての実践アプローチにとって必要不可欠な構成要素である
- ②過程は、ソーシャルワークの問題解決とクライアントの変容・成長を目標にした行為の積み上げである
- ③過程は、時間的変化と力動的活動を伴い、それは、常に直進的ではなくフィードバック機能を用いた援助システムを再形成する
- ④過程が焦点化するのとは、活動そのものではなく活動を継続していくことである
- ⑤過程は、ソーシャルワークの問題解決に応じたいくつもの局面をもち、それぞれに変容するための手続きや行為を提供する

という5つの特徴にまとめられるだろう。

このように過程は、ソーシャルワーク実践そのものであり、各局面の手続きや手順、あるいは行為に規定されるだけでなく、時間的流れと力動性を伴った援助システムであるといえる。

3. アプローチ別にみるアセスメント特性

ソーシャルワーク実践そのものである過程は、歴史を振り返ってみても重要性や内容を整備し強調するだけにとどまってきた。しかし過程は、いかに実践で活用し展開していくかが課題であり、特徴あるアプローチが展開する過程を構成する局面の特性や機能の分析からその課題を解決する糸口を導くことが可能である。ここでは、アセスメント局面に焦点づけてその特性や機

(7) ロバート W. ロバーツ/ロバート H. ニー 久保絃章訳 【ソーシャル・ケースワークの理論Ⅰ】 川島書店 1985年 77頁

(8) 同書 60頁

能を整理していきたい。

すでに問題解決アプローチ、課題中心アプローチ、ジェネラリスト・アプローチなどの過程認識でもわかるように、局面の分類や内容は独自に整理され、それぞれ特有な展開をみることができる。そこで各アプローチのアセスメントに焦点をあて、アプローチの特質と連動した機能や役割を考察していくことで、実践過程で展開されるアセスメントを位置づけていきたい。

ソーシャルワーク・アプローチは、ペイン (Malcom Payne)によると9つに分類⁽⁹⁾されているが、ジョンソン (Louise C. Johnson)では17の分類⁽¹⁰⁾というように、分類にも統一性がなく問題や対象の特殊性との関係で多くのアプローチが生み出されてきている。そのなかでもわが国で、比較的認知されている5つのアプローチについてアセスメントの過程展開での特質を整理すると、表1のようにまとめることができる。

アプローチ名	アプローチの特質	アセスメント特性
1. 危機介入 アプローチ (11)	危機状況にあるクライアントへタイミングと機会を重視した短期的援助で危機を克服する方法	①クライアント危機に焦点化した問題認識（現状認識、習慣的適応パターン、クライアントの対処能力、社会的支持、自害・他害の危険性の発見） ②クライアントの問題に優先順位をつける
2. 課題中心 アプローチ (12)	クライアントが認知し、理解しかつ重要と思う特別な的としての問題を時間的限定の中で解決する方法	①早期アセスメントで面接、観察を用いてクライアントの問題状況、対処能力への情報を選択的に調べ、優先順位の高い課題を選定

(9) Malcom Payne, *Modern Social Work Theory: A Critical Introduction*, Macmilan, 1991.

(10) Louise C. Johnson, *op. cit.*, pp. 347-360.

(11) ドナ C. アギュララ/ジャニス M. メズイック著 小松源助/荒川義子訳 『危機療法の理論と実際』 川島書店 1978年 81-93頁

Malcom Payne, *op. cit.*, p. 108.

		②進行中のアセスメントでは、 的となる問題をゴールと関連 づけて認識過程を發展させる (問題、問題を支える社会的 条件、認知的・効果的環境)
3. ジェネラリスト・ アプローチ (13)	一般的でどんな問題にでも対応 可能な総合的かつ包括的な援助 方法	①体系的・包括的なアセスメン ト ②援助計画を立てるための問題 解決の優先順位の決定 ③クライアント・システムの主 体的参加の促進
4. ケアマネジメント・ アプローチ (14)	複雑なニーズをもつクライエン トの在宅生活の維持・発展のた めに専門職チームが適切な社会 資源を結びつけて援助する方法	①クライアント・ニーズをアセ スメント ②クライアントの生活や社会資 源のもつ力量の認識 ③チーム・アセスメント ④長期的援助のなかでの新しい ニーズへの対応や援助計画の 見直しによるアセスメントの 重視
5. エンパワーメント・ アプローチ (15)	生活の場で広く、人や環境に対 してクライアント自身が自らの 問題を解決していける力を獲得 し発揮できるように援助する方 法	①クライアントの現況、ニーズ、 挑戦していく目標、潜在的能 力の発見 ②個人からの地域、社会・政治 的システムまで資源のアセ スメント ③クライアントとソーシャルワ ーカーの対話や協働を通して アセスメント

この表1から全体的にアセスメントは、各アプローチの特質に影響されて
いる。多少類型化してみると、まず危機介入アプローチ、課題中心アプロー

(12) W. J. ライド/L. エプスタイン 山崎道子訳『課題中心ケースワーク』誠信書房
1979年 45-63頁

Richard L. Edward, Editor-in-Chief, *Encyclopedia of Social Work 19th*, NASW PRESS,
1995, pp. 313-318.

チやケアマネジメント・アプローチにおいては、問題の特殊性や対象の特性との関係でアセスメントの手続きや手順が整理されている。次にジェネラリスト・アプローチ、ケアマネジメント・アプローチ、エンパワーメント・アプローチは、クライアントとその環境全体をアセスメントしていく生活の視点を重視した展開になっている。またエンパワーメント・アプローチは、ジェネラリスト・アプローチから枝分かれした方法であるので、両者は類似したアセスメントの特性を有している。しかし、エンパワーメント・アプローチの方が援助目的を明確に示している分、具体的でアセスメント内容も目的に焦点化され整理されている。同様なことは、ケアマネジメント・アプローチにもいえる。

このように5つのアプローチは、ジェネラリスト・アプローチのアセスメントを基本形とすれば、各アプローチのアセスメントは、問題、対象、方法への目的と特質によって相違がみられる。それらは、アセスメントの内容が

- ①時間や期間の制約
- ②問題の限定
- ③クライアントの範囲
- ④ソーシャルワーカーと援助体制
- ⑤制度や政策とのかかわり
- ⑥局面の分類とアセスメントの位置

(13) 副田あけみ「ケアセンターにおけるソーシャルワーク実践—ジェネラル・メソッドによる検討」『人文学報』No.233 東京都立大学人文学部 1992年 109-157頁

副田あけみ「社会福祉援助実践者に必要な専門性と専門職アイデンティティ」『人文学報』No.242 東京都立大学人文学部 1993年 133-141頁

(14) 白澤政和『ケースマネジメントの理論と実際』中央法規出版 1993年 11頁

デイビット P. マクスリー著 野中猛・加瀬裕子監訳『ケースマネジメント入門』中央法規出版 1989年 21-58頁

Norma Radol Raiff with Barbara K. Shore, *Advanced Case Management*, SAGE publications, inc. 1993, pp. 227-228.

(15) Karla Krogsrud Miley, Michael O'Melia, Brenda L. Dubois, *Generalist Social Work Practice: An Empowering Approach*, Allyn and Bacon, 1995, pp. 88-104.

⑦フィードバック機能の重視

という7項目をどのように取り入れ、組み合わせたのかということと大いに関係している。

アセスメントは、それぞれのアプローチ特有の援助展開を行うために不可欠な局面である。さらにアプローチが特殊性や固有性を明確にしなが実践していくためにも、アセスメントの基本的な構成要素の整備と一般化された過程づくりの必要性を再認識させられるのである。

4. 他局面とアセスメントの関係

実践過程は、決してアセスメントだけで成り立っているものでなく、他局面との相互作用によって効果的な援助が展開できることは自明の理である。ここでは、まずアセスメントと関係する他局面とのかかわりをとおして、アセスメントのもつ機能を整理し効果的援助の足がかりとしたい。

実践過程は、先行研究をみる限り局面の区分が一致しているといえないが、ここではアセスメントと関係している局面として、インテーク（エンゲージメント⁽¹⁶⁾）、プランニング、インターベンション、モニタリングを考察してみたい。また、アセスメントが各局面へ効果的に機能するためにはフィードバックの存在も見逃せず、そのことについても触れたい。

はじめは、ソーシャルワークの入り口局面としてのインテーク（エンゲージメント）を考察してみたい。これは、一般的に初めてクライアントが援助施設・機関を訪れ、問題をソーシャルワーカーが受理するまでの一連の段階を示す局面である。インテークは、現在でも日本の文献によく登場し定着しているが、アメリカでは、エンゲージメントやアセスメントに取って代わら

(16) ジェネラル・メソッドでは、第一局面をエンゲージメントと呼びすべてのクライアントとその環境、クライアントの感情、問題解決の目標についての多くのシステムを研究し、整理する機能を有している。この点では、問題を受理し援助に取りかかるかどうかを決定するという意味のインテークより積極的な側面をもつと理解できる。

れている。

インテークは、一般的に①問題の明確化、②信頼関係の確立（パートナーシップの形成）、③施設・機関の役割とサービスの明確化、④援助契約と他施設・機関への委託、を目的に実施されてきた。一方、アセスメントは、援助過程の初期において①問題の全体的・システムの理解のためのデータ収集、②クライアントの能力や潜在的力の理解、③活用可能な資源の理解、④集められた情報からプランニングのための取捨選択、を行うとされている。インテークが目的を達成するために広く具体的な情報収集と認識を行う機能を果たしているところからアセスメントは、インテークと単純に線引きできない。1960年代以前のように数少ない援助方法しかなかった時代には、インテークは施設・機関への経路とクライアントの意識の問題、問題の多様性と特殊性の問題、援助のなかの情報認識方法の問題などのかかわりで大きな意味をもっていた。しかしクライアントが、今日の多様なアプローチやサービスを選択できる機会のなかにあつて、インテークはアセスメントの機能に吸収されていった感が否めないのである。

第2にプランニングやインターベンションがアセスメントとどのように関係するのかを整理してみたい。プランニングは、集められた問題がアセスメントされることによって具体的な問題解決のための目標設定と終結までの手順を描いていく局面であり、その立てられた援助計画の導く方法の具体的かつ積極的实施がインターベンションである。

これらのプランニングやインターベンションは、はじめになされたアセスメントに基づき進められるが、最後まで計画どおりにいくとは限らない。そこで、実践目標を達成するために新しいプランニングとインターベンションの局面が機能し、そのための新たな情報収集と認識過程が働くのである。これが適切なプランニングとインターベンションのためのアセスメント機能である。さらにインターベンションにかかわるアセスメントには、ゴールとターゲットを決定する専門的判断を伴う重要な役割もみられる。また両局面では、問題解決のために新たな問題が発生し計画や実施方法を修正したり、変更する機能も働くと考えられ、こうした場合にもアセスメントは機能するの

である。このようにクライアントにとって効果的な援助計画の作成と実施を追求していくために、アセスメント機能は不可欠であり、アセスメントは有効なプランニングとインターベンションを遂行できるまでそれぞれの局面のなかで常に循環するのである。

第3の関係局面としてモニタリングは、一般的に援助が計画どおり進められているのか否かについて援助活動の見直しの判断をすることを意味している。モニタリングは、具体的に①援助計画の遂行状況と程度、②援助計画で設定した目標の達成度、③援助内容とクライアントのニーズ充足との一致度、④援助活動に現れる新しい問題やニーズの発見という4つの目的をチェックする機能を有し、それらの達成状況でアセスメント局面に戻るか評価の局面に進展していくのかを決定する機能をもっている。この段階のアセスメントは、援助過程の終盤に実施され、モニタリングによって①新たな問題やニーズの発生、②介入の失敗、などが明らかになり援助計画の立て直しをはかる必要がある場合に機能するため、終結に向けての情報認識過程でなければならない。モニタリング局面で機能するアセスメントは、問題解決を促進するプランニングやインターベンションに焦点づけられているのである。

このようにアセスメントは、各局面で多少強調される機能に相違がみられるが、根底にある中心的視点は、援助に必要な状況、能力、資源等の的確かつ適正な認識を行おうとするところにある。そしてこのような機能をアセスメントが果たすためには、フィードバック機能が重要なのである。これまでフィードバック自体は、システム論でシステムの調整と統制を支えている基本的機能として理解されてきた。この基礎的なフィードバック原理をレヴィン（Kurt Lewin）は、社会現象の領域にもち込み「フィードバックは、望まれた方向と現実の方向との間に相違が生じたら、『自動的に』活動が修正されるか、あるいは計画が変更されるように作用しなければならない。」⁽¹⁷⁾と具体的行動に対する説明概念として指摘している。

こうした研究は、ソーシャルワークにおけるシステムの思考とフィードバ

(17) W. バックレイ 著 新睦人・中野秀一郎訳 『一般社会システム論』 誠信書房 昭和55年 217-222頁

ック機構にも波及してきているといえる。特に、ソーシャルワークのフィードバックは、人間と環境から成り立つシステムで人間を意志決定させ行動に導き、その行動が環境に働きかけ変化させることで人間に最適な新しい環境をもたらすために、またその環境が将来の意志決定に作用していくために情報提供を制御・調整する機能⁽¹⁸⁾として注目されるようになったのである。フィードバックにとって実践目的を達成するためには、情報の提供と活用が均衡維持に不可欠であり、その情報収集と認識過程がアセスメントである。このように考えると、フィードバックは、適正な実践の定常状態を保つためにアセスメントを起動させる機能を有するのである。そしてフィードバック機能を効率よく活用していくことが、ソーシャルワーク実践の効果的な展開に重要な課題となる。

5. メゾ・ソーシャルワークのアセスメント展開

このようにいくつかのアプローチや展開局面自体がもつアセスメントの特質や機能は、決してミクロ・ソーシャルワークだけのものではなく、マクロ的側面にも受け継がれる特徴である。高沢もソーシャルワーク実践は、パラダイムの転換から「人と環境、臨床実践とソーシャル・アクション、ミクロ・システムとマクロ・システムという二分法的用語で考えなくてすむ理論体系の構想」⁽¹⁹⁾をもつべきだと、マクロ的視点の必要性を示唆している。

そこで本項では、エコシステムの視座を具現化していくソーシャルワーク実践過程を視野に入れ、そのなかでアセスメントがクライアント個人に対する側面から制度・政策を策定していくというメゾの側面までの機能を明確にすることを目的に図1を作成した。図1は、クライアントの生活問題から政策決定や制度化までの一連の流れのなかで、何に対してアセスメントを行い、

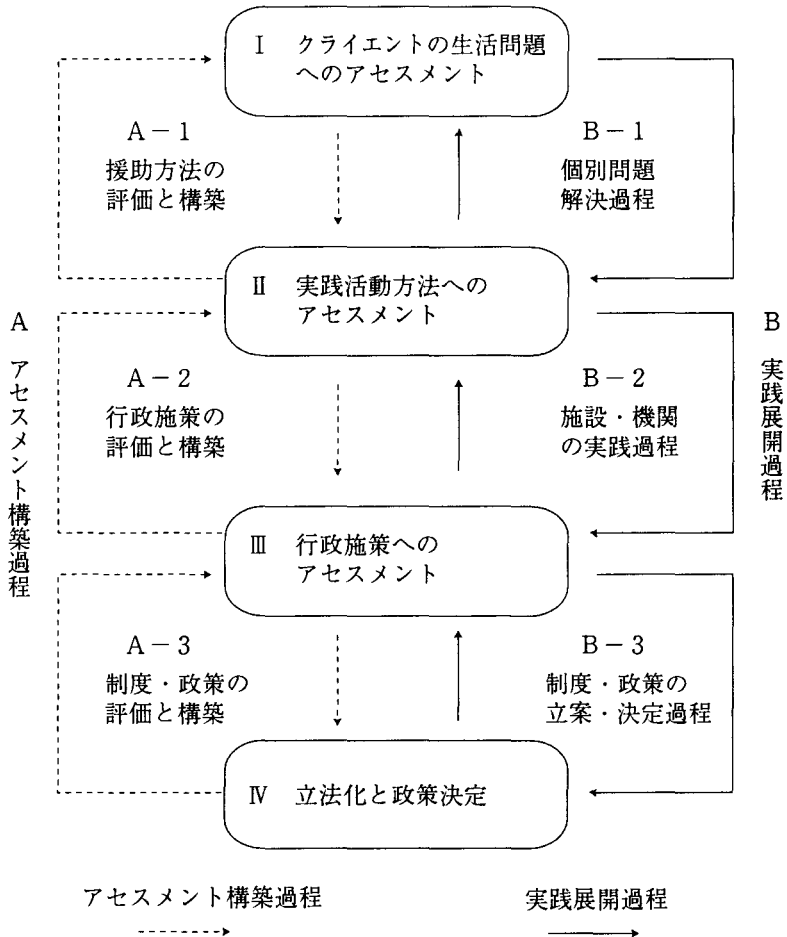
(18) 太田義弘 前掲書 178-179頁

岡村重夫他『社会福祉の方法』勁草書房 1979年 110-112頁

(19) 高沢武司「社会福祉理論のパラダイムの転換」仲村優一編『福祉サービスの理論と体系』誠信書房 1989年 54頁

メゾ・ソーシャルワーク実践過程
（アセスメント局面の展開）

図 1



どのような動きを示すのかを表したメゾ・ソーシャルワーク実践過程のアセスメント局面の展開図である。ソーシャルワーク実践過程は、実際にアセスメント局面のみで成り立っているものではないので、同様な展開過程がインテークから終結までであると理解できる。その意味では、アセスメント局面に着目したメゾ・ソーシャルワーク実践過程であるといえよう。

具体的なⅠからⅣの各アセスメント枠を説明すると、Ⅰ．クライアントとソーシャルワーカーの援助、Ⅱ．ソーシャルワーカーの所属する施設・機関の援助方針、Ⅲ．地方自治体の行政施策とその運用、Ⅳ．国の立法化と政策決定にかかるアセスメントからなりたち、ミクロからマクロまでの実践過程で常に局面展開が行われ、それが循環するという構図になっている。

メゾ・ソーシャルワーク実践過程でのアセスメント機能は、大別して2つの循環システムによって展開している。Aシステムは、破線でアセスメント構築の過程を表しており、ミクロからマクロに向かい、個別のアセスメント方法や行政施策内でのアセスメント機構や制度・政策状況をアセスメントし一般化していこうとする機能である。そこでのアセスメントは、個別の問題解決をとおして、ソーシャルワーカーの方法としてのアセスメントを確立し、それがさらに所属する施設・機関のアセスメント・システムを作り上げ、同様に地域レベル・国家レベルのアセスメント・システムを形成していくと考えることができる。またA-1、A-2、A-3それぞれにフィードバックは機能し、各領域での方法や施策などを構築していくシステムを築いている。

一方、Bシステムは、制度や政策が地方行政におろされ、その具体化として施設・機関の実践や所属するソーシャルワーカーの個別の実践展開がなされるマクロからミクロへのアセスメント実践展開である。このBシステムは、国や行政の制度・政策をいかに具体化し、それを個別援助にどう展開していくのかという実践で活用するアセスメントの方法や手続きの定式化のための循環図である。そのためB-1、B-2、B-3のそれぞれのフィードバックの構図は、問題解決や政策決定にかかわる実践でのアセスメント展開を示している。

またこの図1は、AシステムとBシステムという縦の流れでみることもできるが、A-1からB-1、A-2からB-2へという横の流れでみることも可能である。特に個別の実践展開には、定式化されたアセスメントは必要で、そのアセスメントの一般化には実践での検証が不可欠であるというように、車の両輪で展開している。特にその検証は、実践展開されたことに対する評価とそれに基づく一般化への構築過程から導かれるものである。

実践過程で展開するアセスメントは、アプローチや局面との関係でその機能は特徴づけられているが、アプローチの固有性や局面の効果性を高めるためにも定式化されたアセスメントが求められている。図1は、このような視点を含み作成したのである。またこれまでのソーシャルワークは、クライアントとソーシャルワーカーの援助で完結したり、国の政策決定は自治体の行政施策や運用で具体化されているという認識まででとどまり、それがマイクロからマクロまで循環しているとはほとんど理解されてこなかった。その点においても図1は重要な示唆を与えている。

とりわけエコシステムの視座からのアセスメントは、それぞれ独立しているものではなく、すべて影響しあい関連して展開していくという発想が中心にすえられている。そしてそれをつないでいるものがフィードバック機能である。ソーシャルワークにおけるフィードバックとは「システム過程で処理されてきた情報をアセスメントし目標に対する結果の適合状況を維持するために、情報を循環再処理するシステムのもつ基本的制御調整機能をいう」⁽²⁰⁾とまとめられている。このように理解するとフィードバックは、過程のなかに内包されている重要な機能であり、図1はフィードバック機能を強調したアセスメント展開過程図といえるだろう。

6. おわりに

本論文は、実践過程で展開するアセスメントの特性と機能をアプローチの特性や他局面機能との視点から関連づけて述べてきたものである。ここでは、アセスメントがいかに各アプローチの特徴ある展開に影響され、また他局面と相互作用することによって効果的な援助を実施することができるかを整理してきた。そしてこのような特性や機能を円滑に活用していくには、アセスメントの一般化と共通認識が不可欠である。その視点からアセスメント局面のソーシャルワーク実践過程図を示してきた。しかしながらその一方では、

(20) 太田義弘 前掲書 179頁

今日までの研究や実践が独自の過程認識とアセスメントを位置づけてきた経緯もある。

どちらもソーシャルワーク実践が効果的な過程展開を行っていくうえで重要な視点であり、それらをいかに結びつけていくかが今後の課題である。すなわち過程研究を深化させるためには、ここで示してきたようなソーシャルワーク実践過程のシステムの動きと流れがわかる基本型と同時に問題・対象・方法の特殊性や局面機能の働きの相違による個別な展開パターンの検討が必要となる。今後残された課題は、個別的な展開パターンの類型化を視野に入れたアセスメント機能の分析を行うことである。